構文の意味的制約に関する認知言語学的考察

京都大学大学院 人間･環境学研究科
李 在 鎬(リ･チェホ)
lee@hi.h.kyoto-u.ac.jp

1. はじめに(目的)

本研究は二つの目的を持つ。第一に、[2] の先駆的研究ならびに[1] [3] [4]らによって展開された構文理論の枠組みから日本語の結果構文(resultative construction)を分析することで、[5]による語彙意味論の限界を解決し、また新たな結果構文分析を提案することである。第二に、この構文現象を記述すべく、時空間の制約を取り入れた新たなモデルを提案する。またこれら二つの提案により、間接的に日本語の分析においても、構文的アプローチが妥当であることを示し、構文理論の新たな可能性を探っていきたい。

2. 構文の記述的要請

本稿の考察対象の特徴を明らかにするため、まず、日本語のスクランブリングによる語法の問題を取り上げる。

(1) a 柴田先生は多くの医局員を一人前の医師、研究者に育てた。
b ??柴田先生は一人前の医師、研究者に多くの医局員を育てた。

(1a) と (1b) は内項の配列順序、すなわち、「を」と「に」の語順を除いては、二者は同一の要素で構成されていると見なすことができる。にも関わらず、二者の間には文としての自然さという面で大きな相違が見られる。この点に関連するさらに興味深い事実として[12]から得た以下の事例を報告する。

(2) a N1 が N2 を N3 に立てる
(N1 put forward N2 as N3)
b N1 が N2 に N3 を立てる
(N1 create N3 on N2)

(3) a N1 が N2 を N3 に留める
(N1 leave N2 as N3)
b N1 が N2 に N3 を留める
(N1 put N3 on N2)

(4) a N1 が N2 を N3 に使う
(N1 employ N2 as N3)
b N1 が N2 に N3 を使う
(N1 use N1's N3 for N2)

(2) から (4) に見られる交替現象を捉えるには、次の 2 点が重要となる。1 点目として、いずれの組み合わせも一つの動詞が二つの配列の統語パターンと共起している点である。2 点目として、英訳が示唆しているように、形式と意味の対応にある種の規則性がうかがえる点である。

以上の単純な観察に対して、次の問題提起を試みる。a) (1) から (4) の分布関係はどのような言語事実を反映しているのか、そして、b) その言語事実を正しく捉えるには、どのような位置づけや分析が必要かの二点である。

3. 構文効果の観察記述

(1) の類例として (5) が挙げられる。

(5) a 村民が彼を村長に選んだ。
b 母が知人を家庭教師に迎えた。

(5)は、形式的には、3 つの必須項でなりたっているが、[9] の示唆により (6) の使役移動構文との比較が有効と言える。

(6) a 家元ガ弟子ニ免許を与エル。
b 銀行ガ彼ニ金ヲ貸ス。

(6)は[7]の手法を借りれば、図.1 に示す認知事象(以下、事態 1)として特徴づけられる。

図.1〈例(6) の事態構造〉

では、本稿の中心的現象となる(5)の認知事象はどのように規定すべきだろうか。まず、(5)は(6)と同様に他動詞の特性とされるエネルギー伝達の関係が見られ、働きかけを文の基盤とする。その証拠として（7）と（8）の統語テストの結果を示す。

(7) a 彼が村長に選ばれた。
　　b 知人が家庭教師に迎えられた。
(8) a 弟子に免許が与えられる。
　　b 彼に金が貸される。

その一方、両者の違いとして A）と B）の振舞いに注目してほしい。

A) 結果事態の成立に関する制約
B) 内項の配列に関する制約

A）のテストとして、「Y(ヲ格)が Z(ニ格)になる」の適確性をみた場合、

(9) a 彼が村長になる。
　　b 知人が家庭教師になる。
(10) a *免許が弟子になる。
　　b *金が彼になる。

以上の観察により、(5)の認知事象は図 2 のように「Y が Z になることを X が働きかける」事態(以下、事態 2)として分析できる。

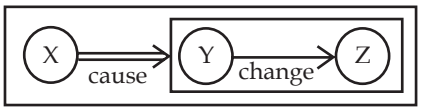

図.2〈例(5) の事態構造〉

次に B)のテストとして内項を交替させてみた。

(11) a ?村民が村長に彼を選んだ。
　　b ?母が家庭教師に知人を迎えた。
(12) a 家元が免許を彼に与える。
　　b 銀行が金を彼に貸す。

(11)、(12)の観察結果を受け、次に「迎える、選ぶ」は「-に-を」の配列を許容しないのかを調べてみた。その結果、(13)の事実が観察される。

(13) a 結局、母が息子にあの嫁を選んだのがそもそもの間違いだった。
　　b 本家の芳我家 2 代目孝直が妹の満智に養子を迎え上芳我として分家。

(13)において興味深いのは（5）と同じ動詞を用いているにも関わらず、(13)は事態 1 として特徴づけられ、(5)が持つエフェクトが生じない点である。その証拠として(14)が挙げられる。

(14) a *嫁が息子になる。
　　b *養子が満智になる。

以上の考察により、形式と意味の対から問題を整理した場合、「X が Y に Z を V」は事態 1、「X が Z を Y に V」は事態 2 との対が示唆される。

4. 先行研究の批判的検討

3 節で示した観察を一般的レベルで記述するため、本稿では結果構文に注目する。とりわけ日本語の結果構文研究に関しては[5]、[6]の先駆的研究があり、二点の重要な指摘がなされている。a）日本語においても英語同様の機能を示す構文現象（結果構文）があること、b）この種の問題は統語ではなく、意味の問題から捉えるべきという重要な見方である。

こうした先行研究にそって問題を捉えなおしてみた場合、以下の 3 点の論証から（5）は結果構文として規定できる。

Ⅰ 直接目的語制約（Direct Object Restriction）が成り立つ点 [5], [6], [8]
Ⅱ 結果述語に該当する「に格」は省略可能な点 [6]
Ⅲ 対応する受動文において、「に格」は主語を叙述する点 [4]

以上の点から、本発表の現象は、形式的にも、機

能的にも従来結果構文と主張されてきた現象の具体例として捉えることができる。ただし[5], [6], [8]の先行研究が指摘する以下の点をめぐっては異なる見解を持つ。

制約: 状態変化を意味する動詞(BECOME [BE AT-[State]])が結果述語を取る

予測: 状態変化を意味しない動詞は基本的に結果述語と相容れない

こうした語彙意味論の枠組み内で提案された制約とそれに基づく予測に対して、本稿は重大な問題点を示唆する。というのも、本発表が報告した現象においてこの制約が充分に当てはまらないからである。ここで明らかになったのは、動詞 X が状態変化の意味を持つ場合、それは、結果述語 Y を取るという一般化が正しくてもその逆が正しいという保証はどこにもないということである。さらに(5)の類例であり、同様の位置づけを持つ現象、すなわち語彙意味論的分析への反例として(15)がある。

(15) a 僕は退院するとき主治医をぼこぼこに殴った。

b 機械がカットした藁を平らに叩きながら藁床の上に並べていく。

c 索餅は小麦粉の米の粉を練った物を縄の形にねじったお菓子

d 大掃除、みんなで床をピカピカにこすった。

(15)においては、1）そのいずれも SOCV であり、2）動詞そのものが（状態変化動詞ではなく）ACT 関数で表現されるものであるにも関わらず、3）S が O に働きかけ、C が示す結果状態にする、という構文効果が生じている。これは動詞の意味から予測できるものではない。よって、動詞の意味とは別に、構文の意味的制約から問題を捉えなおす必要がある。

5. 考察（記述分析におけるモデル）

形式「SOCV」に支えられている、言語事実の問題を充分に記述するためには動詞とは別に、「形式と意味の対からなる」構文の制約を考えなければならない。構文が示す特性を主として意味論的観点、とりわけ、参与者間のエネルギー伝達関係から精緻化する。特に考慮すべき事実として以下の 2 点を挙げることができる。

1） 時系列にセンシティブな点

2） 参与者間の複雑なエネルギー伝達関係

さらに 2）の問題を(16）から考えてみたい。

(16) 太郎が（X）花瓶を（Y）こなごなに（Z）壊した。

(16)においては、X が Y を壊す力（F1）と、X が Z にする力（F2）が関与しており、さらに結果として引き起こされる（Y の Z への）変化によって構成されている。これらの力学的関係は[7]のセッティング参与者モデルを改良した図 3 のモデルで示せる。

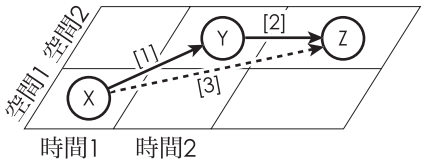

図.3 〈基本事態モデル〉

図 3 は、時間と空間の相関関係を踏まえた上で、二者を区別することを提案するものである。また、そのことを前提にし、X から Z に至る結果構文の項を位置づけるというものである。その結果、時間 1 と空間 1 に位置づけられる X、時間 2 と空間 2 に位置づけられる Y、そして、二者の関係を規定する[1]の直接的力が存在する。また、時間 3 と空間 2 に位置づけられる Z と Y の関係を規定する[2]の変化、さらに、X と Z の関係を規定する[3]の間接的力によって、相互の関係が成り立つ。

こうした結果構文の基本的認知事象を認めた上、動詞との共起はプロファイルベース関係によって捉えられる。

・ 動詞：叩く、殴る、こする、ねじる、回す、拭く、当てる、押す、引く、打つ

・ 認知事象：

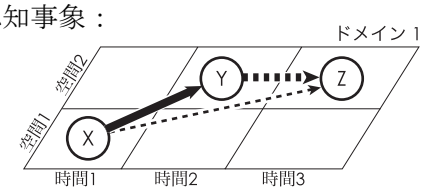

図.4〈働きかけ動詞のプロファイル〉

・ 動詞：つぶす、割る、切る、折る、染める、塗る、揚げる、温める、焼く、乾かす、磨く、固める、汚す、ほぐす

・ 認知事象：

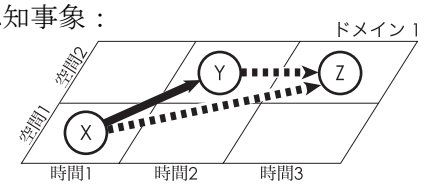

図.5〈状態変化動詞のプロファイル〉

・ 動詞：選ぶ、迎える、決める、使う、改める、受け入れる、出す、起用する

・ 認知事象：

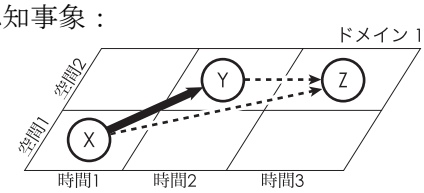

図.6〈行為動詞のプロファイル〉

6. 最後に（動詞の意味をめぐって）

最後に、動詞の問題に関連して、次の立場を示しておく。本研究が示した分析は、実際のところ、動詞の意味を否定するものではない。これは、[10]が指摘するように、動詞にしろ、構文にしろ、ミクロからマクロまでのあらゆる言語のユニットは、他に還元できない認知的動機づけを有する。この見方を踏まえた上で構文と動詞が持つ関係を正しく規定することが重要であり、本研究が示す見方は、むしろ、動詞の意味を経験事実に見合った水準に見直すためのものと位置付けられよう。

〈参考文献〉

[1] Croft, William. 2002. *Radical Construction Grammar*. Oxford University Press.

[2] Fillmore, Charles J., Kay, Paul & O'Connor, Mary Catherine. 1988. "Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of let alone", *Language*,64, pp. 501-538.

[3] Goldberg, Adele. E. 1992. *In Support of a Semantic Account of Resultatives.* Report No.CSLI-92-163. CSLI.

[4] Goldberg, Adele. E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

[5] 影山太郎 1996.『動詞意味論』、くろしお出版.

[6] 影山太郎 2001. 「構文交替のメカニズムを探る－結果構文」、影山太郎(編)『日英対照動詞の意味と構文』、大修館書店. pp.154-183.

[7] Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. II, Descriptive Application*, Stanford, Calif.: Stanford University Press.

[8] Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface.* MIT Press.

[9] 寺村秀夫 1982. 『日本語のシンタクスと意味 第 I 巻』、くろしお出版.

[10] 山梨正明 2000.『認知言語学原理』、東京: くろしお出版.

〈言語資源〉

[11] CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊（新潮社）

[12] NTT コミュニケーション科学基礎研究所.『日本語語彙大系 CD-ROM 版』、岩波書店.